

エッセイ

強訴の神輿

— 京都では語れぬ話 —

高橋 正一

(一) はじめに

平安時代後期の嘉保2年(1095)から室町時代にかけて、比叡山延暦寺の僧徒達が自らの要求を通すため、延暦寺の地主神(守護神)である日吉大社の神輿を担ぎ出し、都大路をデモンストレーションする行為は「嗽訴(ごうそ)以下、強訴」として、広く知られています。

時の「治天の君(最高権力者)であった白河法王も「賀茂川の水、双六の賽、山法師(つまり強訴)。これぞ朕が心にままならぬもの」と嘆くほど、困った存在でした(このエピソードも、高校の日本史の教科書に記載されています)。

強訴の手順は、いきなり神輿を都に繰り出すのではなく、まず比叡山の琵琶湖側の麓、坂本にある日吉大社の上七社の3〜7基の神

輿を延暦寺根本中堂に担ぎ上げます。そして朝廷に「要求を呑まなければ強訴するぞ!」と、いわば脅しを掛けます。どうしても要求が通らないとなったら、いよいよ神輿隊は比叡山を下り、朝廷(内裏)を目指します。これを「神輿振り(みこしぶり)」と称しました。

その神輿が根本中堂から、都に下るルートというのは、比叡山に通じる何本かのルートのうち「雲母坂(きららぎか)」という、別名「勅使が使うので」勅使坂」とも称する最も主要なルートであったことが、公家の日記ほか、当時の記録に数多く残っています。

雲母坂は、延暦寺に至る最短路とされ、付近の地層に含まれる花崗岩がキラキラ輝いて見えたことから、この名が付きました。

さて、その7基の神輿ですが……現在、どの書籍・雑誌・ネット情報を見ても「重量1基約2トン」と書いてあります。これは日吉大社が「重量500貫」と標榜しているためです(正確には、1貫3.75kg×500=1875kg、つまり大よそ2t)。

ところである時、たまたま比叡山頂付近からその雲母坂を徒歩で

下ったことがあったのですが、なんとこれが呆れるほどの悪路でした。なだらかな部分もありましたが、特に終わり近く、つまり登り口付近から標高300m付近までの間は、幅1mほどのV字型に深く(2m近く)えぐれた、傾斜が30度以上はあるのか?という、割堀道になった急坂でした。大きな石もゴロゴロしていました。

「こんな道を重量2tもある神輿が通過できるのか? そもそも道幅が神輿より狭いのではないか?」と、素直に思いました。「国民車」と言われるトヨタ・カローラの重量が約1.2tです。その1.5倍の重量物が7基です。

この時のことは強く印象に残りましたが、特に、それ以上追及しようとはしませんでした。

しかしその後、江戸時代から代々、京都中心部に住んでいたいわゆる町衆で、退職後は京都の観光ガイドをしている元技術職の知人が「2tもある神輿は、物理的にまず雲母坂は下りられない!しかし、それは大きな声では言えない……」と話したのです。

京都人の間では「白タビには逆らうな」という警句が密かに伝承

されています。白タビとは、すなわち「宗教界(寺社)」と「花街(祇園ほか)」を指します。

つまり「叡山(比叡山)の傘下にある日吉神社が重量500貫と云う以上、それに疑義は唱えられない。もし否定でもしたら、最悪、ガイドができなくなることもある」ということなのです。

叡山の影響力というのは、かつての白河法王の時代ほどではないにしても、現在も脈々と生きているのだなど、深く感嘆した次第でした。

それはさておき、この知人も実際に自らの脚で雲母坂を歩いた経験があり、その体験から「2tの神輿はとも下ろせないと確信した」とのことですが、正直、筆者もその結論に限りなく同意したく思ったものでした。おそらく誰でも実際に現在の雲母坂を歩いたら、その結論に同意したくなると思います。

そこで「本当に2tの神輿は、雲母坂を下りられたのか?」多方面から考察を試みてみることにしました。

(二) 往時の雲母坂

まず最初に考えたのは、強訴盛んなりし頃の雲母坂は、現在と同じルートで、同じような悪路であったのか？ということです。当時の雲母坂は今とは違う、もっと傾斜が緩い地形がなだらかな位置にあったのではないか？

現在、雲母坂の入口に、雲母寺跡という石碑があります。

雲母寺(敷地約2万8千坪)は平安時代初期の元慶年間(877~885)、天台宗の相応和尚(そおうかしょう)により建立された寺院で、伝教大師最澄自作ともいわれる8尺の本尊・不動明王立像が祀られていたところから雲母不動堂とも呼ばれていました。

そして雲母寺は雲母坂の入口にあったことから、雲母坂を別名「不動坂」とも呼んでいました。

その後、雲母寺は文化8年(1811)修復が行われた記録などもありますが、『天台座主記』巻7、218世二品承真法親王、文化8年4月19日条)、結局、明治18年(1885)に延暦寺の直轄となり、その後廃寺となりました(遺構らしき石垣が残っている)。本堂の雲母不動堂と本尊の不動明王立像は、近くの赤山禅院に遷さ

れています。

また、現在の雲母坂沿いには雲母寺跡のほか「水飲対陣之跡・淨利結界跡・千種塚旧跡・脱俗院跡」などの平安時代からの史跡が点在しています。

また、雲母坂に沿って、音羽川という谷川が流れており、延暦寺を上下する人達の喉の渇きを癒したことから「水飲(みずのみ)」の地名が残っています。雲母坂を別名「水飲坂」とも称したそうです。

水飲には鎌倉時代以前から建物があり、上り下りする者に薬湯を提供したとの記録が残っています(『元亨釈書』巻第5、慧解2之4、睿山皇慶伝)。平安時代中期の天台宗の皇慶阿闍梨(977~1049)が若き日、延暦寺出家の時に水飲を通りかかって「どうして湯を飲むのか」と言って鋭才を示した説話が知られています(『谷阿闍梨伝』)。

水飲には、脱俗院(別名「水飲堂」という最澄が定めた「十六院構想」の一つがありました)が、『三宝住持集 当山十六院事』には「西坂(雲母坂が比叡山の西側に位置するので西坂)を麓より登山する人が、垢衣を脱俗院で脱ぐから脱俗

院の名がある」と記されています。

そして現在の雲母坂のすぐ南側に音羽川が流れています。以上のことから、雲母坂は平安時代初期から、ほぼ現在の位置にあったと考えられます。

次に路面の状態ですが、当時は今よりもっと坂が整備されていたのではないかとすることも考えられます。

しかし「雲母坂のメインテナンス(保守・補修)」に関して触れた記事は、当時の公家の日記ほか、管見の限りでは見つからなかったため、この考察が一番の難事でした。

ところで筆者は、若年の頃、度々スキーに行きましたが、「上級者コース」とされている斜面に立つて怖気(おぞげ)を振るったものでした。一見「絶壁」に見える斜面だったからです。そしてこの上級者コースの斜度(傾斜角度)と、雲母坂の数カ所の斜度は、同じ程度に見えました(日本にある約500のスキー場の上級者コースの斜度は、ほぼ30度~35度)。

このくらいの斜度の山腹を一つ2tもある重量物を複数下ろそうとするなら、仮に現在の雲母坂よ

り路面が良好だったとしても、堅牢な石段を構築するか、もしくは道(富士山の登山道のように)ジグザグにしなければ、滑ってしまつて不可能と考えました。そのことは、現在の日吉大社山王祭を見ても領けます。

しかし、スキー場や富士山のように、横方向が平坦な地形ではありません。ジグザグ道を造成するにも無理があります。

そして現在のところ、雲母坂の最も傾斜が強い区間に、ジグザグ道や石段の遺構は発見されていません。

さらに、雲母坂は前述したように「勅使坂・不動坂・水飲坂・西坂」などの別名がありますが、古来「行者道」ともなっていました。雲母坂を含む比叡山一円は延暦寺の境内とされており、延暦寺には「行者道は修行のための道だから整備しない」という伝統もありました。

そもそも平安時代初期、雲母坂入口(登り口)に、前述の雲母寺を建立したのは、今日、テレビの特集などで有名になった最難関修行と言われる「千日回峰行」を創始した相応和尚です。もっとも、「雲母坂は、叡山中最も厳しい千

日回峰行の行者道」と言われていますが、相応和尚が千日回峰行を創始した当時、雲母坂は千日回峰行の中には組み入れられていませんでした。

それにしても、以上の各史実や推論から鑑みると「雲母坂を通じて、2tの神輿を下すのは難し」という結論になってしまいます。

しかし、現実には平安時代後期から室町時代まで四十数回も叡山の強訴が行われていることは事実です。

また神輿は、ご神体を遷座、または勧請した「動く神社の社殿」であり「神威の象徴」でもあるので、分解・軽量化して運搬したとも考え難いところです。

(三) 神輿の重量

ここで行き詰っていたところ、偶然、解決の糸口を見つけました。それは、鎌倉で神輿を製作している親方のネット・ブログでした。以下、その一部を抜粋します。

↓ 先祖代々言い伝えられている秘密を皆様に初公開致します。それは「神輿の大きさは測って良いが、重さは決して口にして

はならない」ということです。(途中略) さて、神輿はなぜ重いのか、またなぜ実際より重く言うのか、ご存じですか。(途中略) 神輿の重さを実際より重く言うのは、単に自慢する以上の心理的な効果があるようです。

(http://www.mikoshiya.co.jp/unchi_ku.htm 鎌倉・神輿親方の工房「神輿うんちく学」重さはいえねえ)より) ↑

つまり「神輿の重量は公称されているほど重くない」ということになりません。そう考えてみると、大いに心当たりがありました。

それは日吉大社を拝観した時のことでした。問題の7基の神輿が収蔵庫に収められ、公開されていました。「写真①は収蔵庫入口の解説板」。

といっても、実際に強訴で使用された神輿ではありません。それは、有名な一織田信長の叡山焼き討ちの際に焼失してしまいました。現存するのは焼失からそう遠くない桃山時代に復元された神輿(国重要文化財)です。「写真②は7基の神輿のうち八王子宮と三の宮」。

7基の神輿は、台座幅が平均1

10cm程の、それほど大きくない神輿でした。その時は「これで2tあるのか?」と思った程度でしたが、前述の神輿親方のブログを読んで、神輿について調べてみました。

現在「富岡八幡宮の日本一の大神輿(公称4t半)」始め、全国各地の「千貫神輿(公称4t)」など、超重量神輿も多数存在しますが、神輿親方が言うように正確な重量は不明です。比較的信用できるデータとして「東京浅草・三社祭」の3基の神輿は、台座幅が3基とも1290mm(4尺2寸5分)。重量は一之宮が1060kg、二之宮・三之宮が1000kg。高さは、一之宮が2620mm。二之宮が2120mmとのことです。

神輿の大きさは台座幅(台輪寸法)で表すのが基準となっており、某神輿製作業者の規格では、台座幅90cm(3尺)×高さ260cmで重量550kg、台座幅105cm(3尺5寸)×高さ275cmで重量600kgとなっています。

以上のデータから類推するに、強訴の神輿の本当の重量は500kg以上1t以下と推測できます。

台座幅がこの程度で重量1t以

下なら、現在のように荒れた雲母坂だったとしても、なんとか下せるのではないかと考えました(しかしそれでもたいへんな作業だと思えます)。

(四) 伊庭の坂下し祭り

さらにその推論を裏付ける情報を得ました。現在でも「雲母坂を下る神輿振り」を再現したような祭りを毎年行っている地区があるのです。

それが日吉大社の「山王祭」を模し、850年以上前から始まったという、滋賀県東近江市能登川町の伊庭(いば)地区で毎年5月4日に行われる「坂下し(さかくだし)祭り」です。近江の奇祭の一つに数えられています。

標高約300mの八王子山々頂にある織峰三(さんぼうざん)神社から麓の大鳥居まで、標高差170m・距離約500m・強斜度な岩場の斜面を若者達が、公称重量400〜500kgの3基の神輿を「櫓(そり)のように引きずり下ろす」神事です。3時間〜4時間掛って下しているとのこと。

その斜面はちょうど、雲母坂の

登り口付近（標高約150m）から標高約300m付近までの、標高差150m程の、雲母坂中、最も険しい斜面によく似ています。

しかも八王子山は日吉大社にもあり、織峰三神社の3基の神輿は「八王子・二の宮・三の宮」と呼ばれています。強訴する日吉大社の7基の神輿「八王子・客人・十禅師・大宮・聖真子・二の宮・三の宮」のうちの3基と同名です。

また平安・鎌倉時代、約30回強訴が行われましたが、その過半は3基の神輿で行われています。織峰三神社の近くに安楽寺とい

う天台宗の寺院があり「往時、比叡山の僧兵が日吉大社の神輿を担いだと言われる様に、安楽寺の僧兵も織峰三神社の神輿を山から下ろした」との伝承が伝わっています。

坂下し祭りは、通説では「山王祭りをマネた」とされていますが、「併せて雲母坂を下る神輿振りも伝えているのではないか？」という仮説も考えられます。

この仮説の真偽のほどはともかく、雲母坂と酷似した坂を下るのに重量400〜500kgの神輿を使用しているということは、やは

りその程度の重量が妥当というか、無理の無いところだろうと考えざるを得ません。

※【参考】 伊庭の坂下し祭り

Jタウンネットコラム「伊庭の坂下し祭り」:

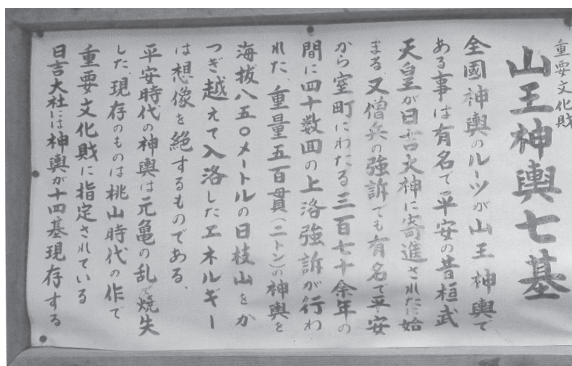
<http://j-town.net/tokyo/column/matsuri/130267.html?n=all>

ダイドール祭りドットコム「伊庭の坂下し祭り」:

<http://www.dydo-matsuri.com/archive/2016/iba/>

下坂守「京を支配する山法師たち」(吉川弘文館) ほか

写真①



写真②

